

《論 文》

竹富島におけるツーリズムの展開と新来住者たちの移住物語（その2）
— 「観光化する島」・竹富島の一員となることの意味を考える—

内 田 司

要 約

経済のグローバル化にともなう地域的不均衡発展問題のひとつとして、消滅の危機に直面している「限界集落」の再生問題がある。また、それは、地域社会学の重要な研究課題ともなっている。そこで、著者も、厳しい状況に直面する中で何とか再生しようとする活動が展開されている地域社会を訪れ、再生の方途を探ることを研究課題のひとつとしてきた。そのフィールド・ワークの中でひとつの気づきがあった。それは、地域社会再生の動きが起こっているところでは、多くの地域社会で、都市から新しく移り住む人たちが数多くおり、さらに実にさまざまな形で地域社会再生の活動で活躍しているということである。この気づきから言えることは、都市からの新来住者たちが厳しい状況に直面している地域社会再生において発揮している力と役割とは何かについて明らかにすることは、地域社会再生研究の大切な課題ではないであろうかということである。また、厳しい状況に直面している過疎地や「限界集落」と呼ばれる地域社会に移り住もうとする人たちが数多く存在するのは何故か、またその意味することは何かということも地域社会再生の社会学の重要な課題であるように思われる。とくに、この課題は、現代社会の私たちのライフスタイル論と密接に関係しているように思われるのである。連載からなる本研究は、そうした課題意識をもちつつ、地域社会再生活動にコミットしてきた、またはコミットしている新来住者研究の第1歩を、沖縄県竹富島を事例として踏み出そうとするものである。本稿では、3人の移住者の方々の移住物語を検討することを主要な課題としている。

キーワード：新来住者、出会い、地域コミュニティ・アイデンティティ

第三章 竹富島の「観光化」に伴う移住者たちの動向と移住物語

1 移住者たちの動向

はじめに、竹富島の観光化にともなう移住者の方々の動向について簡単に検討しておこう。「観光の島」化することによる竹富島社会の大きな変化のひとつは、人口の再生産様式の変化であろう。すなわち、竹富島では、前述のような観光業の発展によって人口の増加を実現しているのである。竹富島の観光産業の発展を検討したところでも参照した上勢頭芳徳^{うえせと}さんの記述をここでも一度参照しておくならば、竹富島は、（2005年現在）「竹富島憲章のおかげで島の心と景観が守

られており、それが竹富島の観光資源となっています。今では年間三五万人程の観光客が来島し、雇用の場が出てきたことで、Iターン・Uターンの若者が増え、結婚出産が相次ぎ、一四年連続人口増加中⁽¹⁾という状況であった。そしてその増加の大きな原動力になっているのが、いわゆる「ナイチャー」・「ヤマトンチュウ」の人たちの竹富島への流入・定住化なのである。竹富島で生まれ育った人たちは、実家が何らかの観光業にたずさわっている、しかも経営者としてたずさわっているもの以外は、Uターンすることもなく島外へ流出したままとなっている。また、たとえ帰島したい意思があったとしても、竹富島では町並み保存の規格に適合させなければならないために、住宅を新築するためには高額なお金が必要となり、若者たちにとってはかなり難しいと言われている。ただ最近ではUターンして新築する方も増えているという。また、島内で得られる職もかなり限られたものとなろう。ただし、島外で生活し、定年退職後自分の家に帰ってくるということは少なくなく見られるところではある。

このように言うと、ではなぜ「ナイチャー」の人たち、とくに若者たちはどうして竹富島に流入し、定住することができるのであろうかと問われるであろう。ひとつの形は、島内の人と結婚するというものである。二つ目は、島内にあるエビ養殖業か、観光業の従業員となり、従業員用の住宅に住むという形である。その中から、三つ目の形として、自立化し、島内の空き家を借りて自活できる仕事を営むというものが出てくる。これらの形以外に、竹富島では、飲食店か民宿などの宿泊施設での手伝い・ヘルパーとして働いている若者たちが大量に流入してくる。ただ、この第四の形の場合は、その大半はごく短期間のもので、短い者で1～2週間、長期の者でも3年以内には島を去っていく。多くは、2～3ヶ月位のサイクルで常に新陳代謝を繰り返している。この第四の形から、島民の人と結婚し、島の住民となった者は、増加している。以上のことを考慮するならば、島内の人と結婚するという事で移住・定住の道が開かれている女性と比較して、男性の場合は、竹富島に移住・定住することの難易度は格段に高いものがあると言えるであろう。

それほど、竹富島では、島以外の人たちが、竹富島社会の一員となることに関しては敷居が高いものなのである。それは、町並み保存地区として、島内の人たちから島の一員として受け入れてもらえなければ、土地や家を借りたり、買ったりすることが自由にできないからであり、島の一員として認めもらうためには、竹富島社会の諸規範を遵守し、社会的役割を引き受け、さらに竹富島の伝統的芸能・文化・行事・祭祀活動に積極的に参加しつづけ、島の一員としての資格があることを示さなければならないからである。それゆえ、島外出身、とくに「ナイチャー」の方で竹富島社会の一員となった方々の「地域の一員となり地域で生きる」ことができるようになった意味を問うことは、「共に生きる生き方」を探究する社会学にとって重要な課題であるように思われる。では、竹富島への移住者の方々の竹富島社会における位置と役割とはどのようなものなのだろうか。

ここまで度々参照してきた八重山毎日新聞の2005年と2007年の1月1日号の特集は、竹富島のUターン・Iターンの若者夫婦の「ベビーブームラッシュ」の記事であった。2005年の特集記事

には、6組の夫婦10人（2人の夫が欠けている）と4人の赤ちゃんの写真が大きく掲載されている。2007年の特集記事には、5組の夫婦10人と赤ちゃん4人の写真が、やはり大きく掲載されている。そして、2005年の記事では、次のような紹介が掲載されていた。すなわち、竹富島では、「観光客が増えると雇用の場ができ、Uターン、Iターンを促し、結婚出産が相次ぎ人口増加に結びついている。……ちなみに（写真に写っている6家族のうち）二家族はエビ養殖場の職員（今は最盛期でお父さんは忙しくて撮影には間に合わなかった）。四家族は観光業」⁽²⁾〔(写真……)は引用者による。以下、断りが無い限り、()や傍点、下線による強調は原文による。〕と。また、2007年の記事の写真に写っている5組の夫婦10人のうち6人が「ナイチャー」の人であった。

また、これらの記事が掲載された年に先立つ2003年1月1日の記事では、「島外からの移住者」について次のように紹介されていた。すなわち、

「民芸館での後継者育成のほとんどが、島外からの移住者で占められている。そもそも竹富島は民芸の島として評価されていたのだから、せっかく居場所を定めた人たちが健康な手仕事に励む姿は心強い。日本民藝館の柳宗理館長も『健全な文化は健全な地域に育つ』と言っているように、島習いした人たちが健全な地域を維持していつてくれるだろう。

それにしても人口三百十四人の中で、竹富島のDNAをもっていない人が百四人いる。実に三分の一の島外者をかかえていても島の景観が守られ、観光が隆盛しているのだから、これは奇跡に近いと言わざるを得ない。島の在り方に協調できる人が住むことができる。

先ず第一に、借りている家の周囲をいつも美しく保てること。共同作業に参加すること。それでいて割り当てられた賦課金を納入すること。まるで人頭税時代のようなのだが、共同体を維持していくのに必要なことで、都市化とはこういったことが失われることをいうのだろう。こういった島の生き方を移住者に理解してもらうためにもレクチャーがある。毎年の成人学級だったり青年学級だったりするのだが、最近ではかえってIターン者よりもUターン者の出席が悪いのが気になる」⁽³⁾というのがそれである。

竹富島最大の祭事である種子取祭も、かつては氏子である島内のものだけが参加できるという決まりが厳格に守られていたという。しかし、1960年代に入ったころには、過疎化による人口減少のため、中学生の参加が期待されるようになっていた⁽⁴⁾ようである。さらに、現在では、「出身を問わず」、竹富島に住んでいるか関係するものであれば師匠の承認を得て誰もが参加することが期待されているという。その様子を、同じく「若手が島の文化を担う」と題する八重山毎日新聞記事がつぎのように紹介していた。「台風の余波で雨が時折ばらつく夜、公民館は踊りや狂言（キョンギン）の練習で熱気に包まれた。竹富島は祭りの島である。二日間にわたって七十演目もの芸能が演じられることで知られる種子取祭は、国の重要無形民俗文化財に指定されてから今年で満二十年になる」⁽⁵⁾。その練習に、参加している「中学生三人や学校の教員二人、青年会の若者、それに女性三人はいずれも本土出身者で織物を学んでいる者、郵便局の臨時、観光業のヘルパーとして竹富島にいる。出身は問わない」⁽⁶⁾と。

以上の簡単な検討でも分かるように、いまや竹富島社会は、主産業である観光業をはじめ、祭りやそれにつわる芸能、そして町並みの景観を守り、島の生活を維持していくための共同作業も、それらの多くは「移住者」たちによって支えられていると言っても過言ではない状況となっているのである。以上のことを踏まえ、いよいよ、以下、竹富島社会の一員とまでになっていると思われる3人の「移住者」の方々の、「島社会」の一員となっていった物語の紹介に移ることにしよう。

2 竹富島への「移住物語」3題

上勢頭芳徳さんの場合⁽⁷⁾

上勢頭芳徳さんは、1943年長崎県生まれ。竹富島との出会いは大学生時代に遡る。同じ大学に石垣島出身の同学年生がおり、その縁で石垣島に旅行に来た。その際、同じ大学の学生であるというだけで、同学年生の家ですごい歓迎を受けた。また、そのとき宿泊した宿に、たまたま沖縄県の教育委員会の一行がおり、意気投合し、知り合うことになった。そして、その一行が次の日竹富島に視察に行くというので同行することになった。竹富島に到着すると正装の島民たちに迎えられ、やはり大きな歓迎を受けたという。そのとき、芳徳さんの頭には、「日本の中にまだこのような社会が存在していたのかという強い思い」が素晴らしいことに出会った記憶として刻み込まれたという。

芳徳さんは、大学卒業後、一旦サラリーマンとして就職した。しかし、その後のサラリーマンと大都会での生活に「嫌気がさしてきた」のだという。そのとき、芳徳さんの脳裏に竹富島での思い出がよみがえったという。そして、沖縄の日本本土復帰の年の2年後、1974年、竹富島を再び訪れることとなった。当時は、沖縄の復帰に伴う、とくに若者たちの沖縄への移住ブームの時代でもあった。今回の竹富島訪問で、芳徳さんは竹富島に住みつき、借りた畑で野菜づくりをするなど、今のことばで表現すればいわゆるスローライフを楽しんでいた。そうした中、竹富島のお寺である喜宝院の住職の娘さんと知り合い、結婚し、竹富島社会の一員としての第一歩を踏み出すこととなった。そして、その後の芳徳さんの竹富島社会での生活は、竹富島における「地域づくり」と切っても切れないほど密接な関わり合いをもつものとなって行くのである。

竹富島の本土復帰以降の「地域づくり」の歴史は、外部資本による土地買い占めと開発に対する反対運動の中から生みだされてきたものであった。その運動に指導的役割を果たしていたのが、芳徳さんが結婚した女性の父親であった。その人物とは、当時の喜宝院住職の上勢頭亨氏であった。上勢頭亨氏が外部資本による土地買い占めと開発に反対する運動において中心的な役割を果たしたことについて、竹富島の「観光と『伝統文化』の意識化」について検討した森田真也氏は次のように言及していた。すなわち、外部資本の土地買い占めと開発に反対する運動の「中心になったのが島の寺の喜宝院住職、私設博物館喜宝院蒐集館の館長で郷土史家の上勢頭亨と町会議員を務めた弟昇である。開発推進派と反対派での軋轢はあったが、結果として住民による開発阻止の

運動は実を結び、外部の企業による開発の阻止を実施させるのである」⁽⁸⁾と。

その後、竹富島では、この反対運動は、「竹富方式」と呼ばれる住民たち自身による地域づくりに継承されていくことになるのであった。そして、この運動がまさしくその地域づくりの中心的な役割を担うことになっていくのである。その中核的内容は、この運動が、外部資本による開発反対運動から、竹富島の「町並み保存」運動へと、文字通り自分たちの地域社会の景観の維持と地域づくりの運動へと進化を遂げて行ったことであろう。そして、その進化する運動の中に、常に上勢頭芳徳さんが存在しつづけていたのである。

この間の動きを、「有限会社眞木が主宰する有志による勉強会」⁽⁹⁾である「東京ソルボンヌ塾」の「竹富島のこれまでの成果と今後の課題」をテーマとする1996年の勉強会における芳徳さんの「講話」と2007年の芳徳さんにたいするインタビュー調査の記録に基づいて簡単に振り返っておこう。「町並み保存」運動への転換の契機は、本土復帰直後竹富島の土地を買い占めていた外部企業が、再開発の動きを示したことである。それは、1982年のことであった。このことを契機に、竹富島の人たちは、全国的に町並みを守る運動があることを知ったという。そして、竹富島の人たちは、同年東京駒場で開催された「第五回全国町並みゼミ」に参加し、外部資本による再開発に反対する竹富島の運動への支援を呼びかけた。この時の竹富島の参加者とは、芳徳さんの奥さんと公民館長、そして東京竹富郷友会幹事長・阿佐伊孫良さんであった。また、その参加の甲斐があって、この「全国町並みゼミ」において、竹富島の運動を支援する決議が採択された。さらに、マスコミも竹富島の運動を好意的、支援的に取り上げてくれたという。竹富島に先行して町並み保存運動に取り組んでいた木曾の妻籠の人たちも竹富島の運動を「応援」してくれ、その後両地域の人たちの長く続く交流も生まれたのである。

以上の、外部資本による開発・再開発への反対運動から「町並み保存」運動、すなわち竹富島の「島づくり」運動への転換の経緯と意義を芳徳さん自身は次のように評価していた。

「沖縄は一九七二年祖国復帰しましたがけれども、復帰する直前から、沖縄の土地は本土の大企業とか観光関係の会社にどんどん買い占められていって、竹富島みたいな小さい島も例に漏れず四分の一ほどの土地が買われていったわけです。そういう土地の買占めに対する反対運動から、島を守る運動が起こって来ました。

しかし昭和五十七年に、以前買い占めた会社が、もうそろそろほとぼりがさめたころだろうと、じわっと根回しを始めたことに気づきました。やっぱりきちんとしたかたちでやっていかなきゃいけないということで、町並み保存という思想を手に入れました。その年に第五回全国町並みゼミが東京の駒場で開催されたんですが、そのころの町並みゼミは駆け込み寺的な性格があったみたいで、第五回大会は竹富を支援する大会みたいだったなあ、と言われております。そのころから町並み保存ということが、私たちの島でも口にのぼるようになりました」⁽¹⁰⁾（下線による強調は引用者による）と。

1986年には、「島を守る運動」の中で手に入れた「町並み保存という思想」の具体化の第一歩

として、「売らない・壊さない・汚さない・乱さない・生かす」という内容の全国的にも有名になった本稿でもすでに触れた「竹富島憲章」が「住民総会」の場で決議・制定された。同年3月には、竹富町議会で、「竹富町歴史的景観形成地区条例」が可決され、さらに翌年4月には、竹富島の集落全域が国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されることになったのである。そして、この選定を契機として、竹富島の住居等の建造物の「保存整備事業」が文化庁の補助事業として毎年進められることになっていく。また、その事業の進展と、まさしく並行して、第一章で検討したような竹富島の観光化が発展していったのである。

以上の竹富島における「反対運動」から「守る」運動へ、そして「町並み保存」の運動へという地域づくりの歴史に関しては、これまで多くの、しかもさまざまな分野の研究者たちにより研究・検討され公にされてきている。さらに、本稿のなかで屋上屋を重ねる必要はないものと思われる。本稿にとって重要なのは、芳徳さんが、とくに「町並み保存」運動と事業による竹富島の地域づくりの中核的役割を担ってきたこと、そしてそれは芳徳さんの人生にとっての意味という面から見れば芳徳さんのライフワークとも言える運動と事業ではなかったかということを確認することであろう。

この点に関しては、先に参照した『竹富島に何が可能か』の編集後記の中で次のように紹介されていた。すなわち、

「上勢頭さんは、島では『^{むら}邑さん』とか『^{よしのり}芳徳』とか呼ばれています。長崎県生まれ。この島にやってきたのは、沖縄の本土復帰二年後の一九七四年五月のこと。もう二三年この島でくらししています。この間に、島のことをおおいに勉強しました。いまでは、竹富言葉を島の人に優るとも劣らないほど上手に話します。島のことを深く考え、それを実践しようとしている一人です。島の若手リーダーであるとともに雑務を一手に引き受けています。

そのうえ、島の文化の基点である喜宝院蒐集館をあずかっています。……蒐集館はものすごい博物館です。ぜひ、じっくりと見て確かめ、味わってほしいとおもいます」⁽¹¹⁾と。

以上の紹介文を読んですぐ分かるように、芳徳さんの竹富島社会に対するアイデンティティはなみなみならぬものがあると言える。それは、竹富島で生まれ育った人たち以上に竹富島のことばを使いこなせるようにまでなっていると評されていることによって示されている。また、芳徳さんは、1991年に、竹富島公民館の主事に任命されている。このときのことを、芳徳さんは、インタビューの中で次のように回顧していた。「ようやくこれで認められたか。消防団員にも入れてもらえた。(これらは)地域の人でないとやれない。戦後沖縄の本土復帰後の移住者の中で、私が公民館主事第1号だ」[()内は著者による補足。以下、同様の表記法となる]。この回顧には、竹富島の役員に選出され、本当の意味で島の一員として認められたことについての喜びが読み取れるように思われる。さらに、復帰後の移住者の中で、初めて公民館主事に選出された要因に、芳徳さんが結婚した相手が、竹富島の活動的な女性であったことも大きかったのではないかということも語られていた。芳徳さんは、さらに2010年には、竹富島役員の最高位に位置する

公民館館長・竹富島区長に選出されている。

以上の簡単な検討からも分かるように、上勢頭芳徳さんの場合、竹富島社会との向き合い方として、竹富島で生まれ育ち竹富島DNAを所有している人と同じような意味で竹富島社会の一員になろうとして生きてきたと言えるのではなかろうか。インタビューするまで「芳徳さんはてっきり竹富島出身の方だと思っていた」と話をしたら、「それは光栄なことだ」と答えてくれたときの芳徳さんの喜びをあらわした笑顔が著者には印象深く記憶に残っている。

上野寛さんの場合

上野寛さんは、現在竹富島の西集落のエリア、夕日の美しさで有名な西棧橋近くのところで、「貝のギャラリー&アクセサリー」のお店Islandを開業している方である。Islandでは自作のアクセサリー他を販売しているだけでなく、600点を超えるさまざまな貝の展示もしている。Islandのアクセサリーについて、沖縄の観光雑誌のひとつである『うるま』の中で次のように紹介されていた。

「上野さん夫妻が手作業で作る貝殻アクセサリーが『Island』の中心商品。光沢と微妙な色彩は、豊かな自然の賜物だ。そこに上野さんの手加わり、愛らしい製品になる」⁽¹²⁾と。

以上のように、上野さんは、観光化する竹富島において貝殻のアクセサリー他のお土産店を営んでいる方である。では、そのことは、竹富島の観光化の中でどのような意義を有しているのであろうか。竹富島観光の形は、典型的なマス・ツーリズム型観光であると言えよう。すなわち、竹富島の観光を支えているのは、パックスツアーで旅行代理店が送りこんでくる観光客である。そのほとんどが、2～3時間程度で島中を回り、石垣島に戻っていく。そして、その観光の目玉になっているのが、水牛車観光である。竹富島には、2つの水牛車観光会社が観光客の受け入れを競い合っている。また、大量のパックスツアー客を、離島棧橋から水牛車観光の場所と島内観光のために短時間で運搬しているのが有償バスである。さらに、自由時間に、これも短時間で島内を駆けめぐらるのにレンタサイクル観光客の受け入れに重要な役割を果たしている。

このような形の観光のあり方を、呉錫畢氏は、「ピノキオ観光」と呼んでいた。すなわち、呉氏は、「このような観光は、あたかも、踊るのはピノキオであるが、その受益が`ピノキオ、に多く受けられないようなもの」のようである。つまり、素晴らしい観光資源を持ちながら地域経済に大きく結びつけない構造を、筆者は`ピノキオ観光、と呼んでいる。ユニークなピノキオの踊りに客は集まるが、肝心のピノキオには経済的に寂しい構造のことをいう。竹富島の観光形態をみると、沖縄全体が`ピノキオ観光、形態として浮かび上がる。`ピノキオ観光、から脱皮するためには滞在型観光が最も望ましい」⁽¹³⁾と云うのである。

呉氏の言う「ピノキオ観光」であっても、「観光化」の波は、竹富島の人たちに大きな経済的恩恵をもたらしたことは間違いない。とくに水牛車観光の経営者、観光バス経営者、レンタサイクル経営者、民宿等宿泊施設の経営者、そして食事処の経営者の方々は、大きな経済的チャンス

得ることができたのではないだろうか。ここまで列記してきた観光関係の事業は、その大半は竹富島のDNAをもった方々である。さらに、シーサーをはじめとする焼き物や貝や流木・石などを素材としたオリジナルな工芸品のお店なども竹富島の観光化には欠かせない要素⁽¹⁴⁾として著者が調査に入るようになった数年位前から増加していたようである。そして、このオリジナルな焼き物や工芸品のお店は、ほとんどが移住者の方々によって開かれたものである。上野さんの「貝のギャラリー&アクセサリー」のお店Islandもそのひとつだ。

このことは、焼き物や工芸品店を営んでいる上野さんたちは、竹富島の観光化を島の経済につなげる新たな形を創造したと評価できるであろう。また、こうしたお店は、パックスツアーによる駆け足的な観光客が、僅かな自由行動の時間の中で直接「島の人」に接する機会とスポットを提供している。訪れたお店でたとえそれがほんのわずかの会話であっても生まれるならば、それは観光客にとってよい思い出となるにちがいない。その中からリピーターが生まれるようなことが起こるかもしれない。確実に上野さんたちは、観光の島である竹富島の観光的魅力を高めていると言えるのではないだろうか。

同時に、上野さんは、後に言及することになるが、竹富島社会を支える重要な担い手となる道を歩んでいる。竹富島は、「神聖」な島として八重山地方の中でも一目おかれている。また、古くから八重山地方の政治の中心地としての役割を担っていた島でもある。それゆえ、島の人たちのそうした竹富島の歴史と伝統に関するプライドは非常に高いものがある。さらに、年間の祭祀行事が非常に多く、しかも現在でもそれらの祭事が継承されている。『竹富町史第二巻竹富島』の記述によれば、「1949年（昭和24）に、祭祀行事の統廃合を実施した」⁽¹⁵⁾が、それでも新暦で言えば10～11月に実施される種子取祭を中心に、年間19の祭祀行事が行われている（「2008年度（平成20）竹富公民館祭祀行事表」による）。同じく『竹富町史第二巻竹富島』によれば、1949年以前には33の祭祀行事を行っていた。竹富島においては、「祭政一致の自治が継承されており」⁽¹⁶⁾、そうした多くの祭祀行事は、現在では「区長・公民館長」および「支会長・主事」たちの公民館および3つある集落の役員たちによって主催されているのである。竹富島社会を支える重要な担い手になるということは、そうした役員という役割を引き受けるということも意味しているのである。すなわち、それは、自己の生活を経済的にも時間的にも犠牲にしても島の祭祀行事を主催する役割を全うしなければならないということの意味している。

ここまでの予備的な考察を踏まえ、いよいよ上野寛さんの竹富島への移住の歩みを概観していくことにしよう。上野さんは、1973年に鹿児島で生まれ、1才位まで生活していたという。その後、大阪府八尾市、長野県と移動を繰り返し、小学校時代は奈良県橿原市で過ごしている。高校卒業後静岡県東海大学に進学している。4年間海洋学部で学んでいる。卒業後、沖縄県竹富町西表島にある東海大学海洋学部付属の施設である沖縄地域研究センターで研究生として研究生生活をおくっている。研究テーマは、ミクロネシアのパラオのシャコ貝であった。そして、ここで上野さんは自分のその後の人生を決定づける出会いに遭遇することになる。すなわち、当時竹富島

で車エビの養殖事業を手がけていた上勢頭保さんからその養殖場で働くよう誘われたのである。

インタビューの中で上野さんは、上勢頭保さんのことを「ボス」と呼んでいた。そのボスから、はじめ上野さんは、「シャコ貝の養殖をやらないか」ということで求人されたという。しかも、入社したらパラオに留学させてくれるという条件を提示された。この提示に上野さんの心が動き、入社することを決意する。こうして、ボスとの出会いにより、これで「給料をもらいながら、シャコ貝について本格的に学べる」との上野さんの生きていく方向性が定まっていくことになったのである。また、このボスとの出会いは、上野さんにとって自分が生活する場としての竹富島との出会いでもあった。こうして上野さんは、1990年1月15日に竹富島の車エビ養殖の会社に入社したのである。そして、シャコ貝養殖の研究のためパラオに留学した。しかし、留学後たった3か月で竹富島に呼び戻されることになる。その理由は、シャコ貝はワシントン条約により輸入が禁止されていたからである。上野さんは、車エビ養殖の責任者として働くことになった。

以上のように上野さんが竹富島で暮らすようになったキッカケは仕事のためということであった。すなわち、上野さんが車エビの養殖会社に入社した当時すでに八重山地方のあこがれの観光地として全国的に有名になっていた竹富島や竹富島の生活へあこがれたからというのでは、決してなかったのである。インタビューの中で、上野さん自身、「最初は（竹富）島ととことんかかわろうとは思ってはいなかった」と話されていた。休日には、石垣島に行くか、船で海に出て釣りをしてすごしていたということであった。しかし、そうはいつでも、上野さんは竹富島と全くなかかわりをもたなかったわけではなかった。

上野さんは、入社以降竹富島にある社宅で暮らしていた。社宅には住んではいたが、竹富島社会運営のための住民の分担金であった公民館費を払っていたし、島の青年会にも参加していたという。また、竹富島の年中行事が開催されるときには、雑用係も引き受けていた。このように、上野さんは、入社当時から竹富島の一員としての社会的役割を引き受けていたのである。ただし、上野さんの意識の上では、そうした地域社会生活への参加は、「保さん(ボス)から話があったとき、養殖で働いている仲間のかたまりとして参加していた」にすぎないというものであった。

上野さんの竹富島での職業生活の方に目を向けてみると、最初はかなり順風満帆ということであった。当初年間約60トン位出荷し、キログラム当たり2万円という高値がついていたのだという。そのため、会社は大きな収益をあげることができ、毎年の従業員旅行も海外旅行だったというのである。しかし、すぐに出荷価格がさがりはじめ、1997年頃にはキログラム当たり6千円以下にまで下がってしまったというのである。また、1995～1996年頃には、養殖場で連作障害が起き始め、消耗のため養殖場の砂の力が失われてしまうという壁に突き当たっていた。新しく養殖場の砂を入れ替えるためには3千万円位の費用がかかると言われていた。当然会社経営も思わしくなくなっていったという。会社の株も手放さざるをえなくなってゆき、従業員の方々がそれを買い支えるということもあった。当初12名いた従業員も、9人へ、そして4人へと辞めてゆき、1997年からは上野さん一人で車エビの養殖を担当することになってしまったという。

エビ養殖会社の業績が傾きはじめると、上野さんの生活も本当に大変になって行ったという。「1年半位生活できない状況が生まれた」ということもあった。また、エビ養殖の仕事はそれまでも重労働であったが、それを一人で担当せざるをえない中でますますきつくなり、腰を痛めてしまった。上野さんによれば、エビ養殖は竹富島にとってとても大事な産業であったが、「ものすごくきつい仕事だったので、島の人(若者たち)は就職しようと思わず」、島外から従業員を雇用することで維持されていたのである。仕事だけでなく、生活も苦しくなるなかで上野さんが始めたのが、貝を加工して工芸品をつくる「アルバイト」であった。この時期は、上野さんの個人的な生活においては、奥さんと結婚し、家族を形成した大事な時期でもあった。「奥さんが残るにあたって、(貝の加工のアルバイトで)むちゃむちゃかせいだ」「ハンパなかった」という。実は、この時のアルバイトこそが、上野さんの後の仕事になるのである。このような経緯を経て、2006年9月にエビ養殖会社をやめるという決断をする。その直接のキッカケは、奥さんから「やめたら」と言われたことであったという。そのことばで、「潮時」と感じやめるという決心がついたのである。

では、仕事の関係で竹富島に住んでいたにすぎない上野さんが会社をやめた後も、なぜ、どのような理由で竹富島に残り、住み続けることになっていったのであろうか。インタビューの中で、上野さん自身は、そのことに関して次のように振り返ってくれていた。まず、竹富島で「働いていたときは楽しかった」と。このことばを著者は、島で育った若者たちが決して就こうとしないほど仕事はきついものであったが、島での生活全般を考えると「楽しい」という思いが心に残っていたのではないかと理解した。次に、「家のローンが残っていた」のでと振り返ってくれた。著者にも、エビ養殖の会社をやめたあとも、竹富島に残って暮らしていこうと決断するにあたって、家族をもち、家も建てていたことが大きかったのではと思われた。とくに、奥さんが「竹富島に残る決心をしていた」ことが大きかったのではないかと推測されるのである。

上野さんが奥さんと知り合うようになったのは、奥さんが年2回位竹富島に遊びに来ていたことによる。大学卒業後、東京の証券会社に勤めていた。そのため、知り合った後、上野さんは、「給料を全部使って月2回位(結婚前の)奥さんに会いに東京に行っていた」[()は著者による。]という。そうした付き合いを経て、奥さんの「お母さんから大反対されたが、親の反対を押し切って結婚した」。結婚後、お二人は会社の「社宅に住んでいたが、1年半位は、(奥さんは)仕事も辞めたこともあってまいていた」[()は著者による。]という。そのため、奥さんは、当時、東京に「帰る帰らないと悩んでいた」のであった。この間、奥さんは、島の人と一緒に貝の加工品や星砂などを竹富島の浜辺で観光客を相手に売るなど、さまざまなアルバイトを試みていた。また、竹富島のミンサー織りを伝承するための施設である「民芸館」に通い織物を教えてもらうなど、竹富島での生活に適応するための努力を積み重ねていたのである。そうした悩みや迷いは、子どもが産まれたことで吹っ切れるようになる。その子どもさんは、インタビュー当時7才になっていた。上野さんのことばによれば、奥さんは、「子どもができたことで竹富島に残る決心が

ついた。肝がすわった」のだ。2003年に家を建てたことが家族で竹富島に定住する決心がついたことを象徴的に示しているのではないだろうか。しかし、奥さんのその決心もそう容易くついたわけではないようだ。上野さんのことばで表現するならば、「島に残ったということはすごいこと」なのであった。では、どう大変なことなのだろうか。

竹富島は、前述したが、歴史と伝統をもち、神の島として、またかつては八重山地方の政治的中心であった島として、島の人たちの自負心も相当高い地域社会なのである。観光で訪れてすぐすには快適で、とても癒される島と感じる人も多いのではないかと思われるかもしれない。しかし、外部の人が島の人たちに認められ、島の一員として定住しようとするときは、島の年間行事等に参加し、島の生活のルールを習得し、竹富島社会の生活に適応するには大変な努力を必要としているようである。とくに、島社会の中のさまざまな利害関係と血縁関係が複雑に絡み合い、ときに反発し合い、ときにひきつけ合う複雑な人間関係を熟知し、読み解きながら、島内のイベントごとに適切に対応することが島社会の一員として生きていくには不可欠であるというのである。上野さんも、島内の生活に慣れるためには、さまざまな洗礼を受けていた。

その洗礼の一例として、「選挙」のときのある体験を紹介してくれた。もともと八重山地方は保革の政党間の厳しい対立が存在しており、その結果、各種の選挙戦も相当激しいものがある。『新南島風土記』を著わした新川明氏もこのことをその著書の中で与那国島を例にとり次のように表現していた。すなわち、「八重山全地方のならわしとして、政党のいがみ合いははげしい。すさまじいばかりの白黒闘争がいまなおみられるが、与那国島もその例外ではなく、漁業組合までも政党が後楯になって、二つもつくった愚行」⁽¹⁷⁾も行われていたのであると。竹富島も例外ではないようである。

上野さんは、ある選挙戦のとき、島内にあった二つの選挙事務所のどちらにも顔をだしてしまった。さらに、それらの選挙事務所で食事の提供を受けてしまったことがあったという。上述したような八重山地方の選挙風土の中で上野さんがとったそうした行動は竹富島の人たちからすると問題をもった行動だったにちがいない。「めしを食って入れなかったのか」と詰問され、まだ投票していないと「放送で呼び出された」という。「島で生きることは、大変なことである」とあらためて感じざるをえなかったようである。お客さんとして島で暮らしていたときには、「かわいがってもらっていたが」、一度自分も同じ住民の一員となったとたん、「冷たく突き放され、たたき落とされる」と感じる扱いを度々経験したともいう。上野さんは、それらのことを、「自分は島の人たちに試されていた」のではないかと振り返ってくれた。「島の祭祀に奥さんを行かせるように」とのアドバイスを島の人たちから受けもした。それは、島の伝統芸能に関する経験のない奥さんにとって、やはり本当に大変な事柄であったにちがいない。上野さん自身のことばによれば、「時間をかけてなれていく」しかないものなのであった。

それでも、上野さんが、竹富島で暮らしを続けていこうと心に決めていくことになるには、さらにもうひとつの要因があったように思われる。それは、「ボス」である上勢頭保さんの支えだ

ったのではなからうか。上野さんのことばによれば、島外から来た人が島に残りたいと思ったとき、「よっかかるところがなければ、そう簡単には残れない」のであった。上野さんの場合は、「ボスが守ってくれた」し、またボスの回りの人たちも「大事にしてくれた」のである。このエピソードからもわかるように、竹富島の一員となるためには、出会いがある意味で決定的に重要なのである。また、島内の人たちとの関係性をつむいでいくにあたって、子どもができたことも大きかったようである。「子どもができて島の人の対応がハンパなく変わった」というのである。島の人たちはとても子どもをかわいがってくれた。「子どもが（上野さんと奥さんと）島の人たちとの間をつないでくれた」ような気がすると振り返ってくれた。

以上のような経緯を経て、上野さん家族は竹富島で暮らしつづけるとの心をかためてゆき、著者がインタビュー調査をお願いしたときには、竹富島の人たちも認める竹富島の一員となっていたのである。上野さん自身も、竹富島で暮らしつづけるなら、正式に竹富島の人たちから同じ竹富島人として、仲間として認められるようと決心されていたのではなからうか。その上野さんの決心は、竹富島で生きていく上での上野さんのプライドであったように著者には見えた。それだからこそ、「島の人たちでさえ面倒くさいと頭をかかえてやっている」祭祀をはじめとする諸行事に参加し、「命をけずって務めなければならない」島の役職を、ある意味で島の人たち以上に引き受けることをも厭わなかったのではなからうか。インタビュー調査のときには、上野さんは2年任期の公民館の「書記」の役職を務めていた。それでも、上野さんいわく、「もともと島で生まれ育った人たちと同じようにはなれない」ことを実感せざるをえないのだという。それは、竹富島のDNA所有者と移住者との間には目には見えないカベが厳然と存在しているかのようである。そのカベとは何か、社会学にとって興味のつきない研究対象であろう。

その後、上野さんは、2012年度には、竹富町全体の「子ども会育成連絡協議会」の新会長に選出されている⁽¹⁸⁾。また、著者が最近訪問した2013年3月には、竹富島の副公民館長・副区長の役職を勤めていた。そして、その役職を勤めるため、上野さんは、自身の仕事を休みにしていた。さらに、一時的ではあるが家族で居を移し、自宅を開け放って竹富島の祭祀の会場に供し、目の回るような祭祀の進行役をも務めていた。2013年8月号の『やいま』という雑誌の「竹富島の西^{にし}塘^{とう}ばんはじり」という記事でその活躍の様子が次のように紹介されていた。「公民館副館長の上野寛さん、主事の登野原栄立さんが顔を真っ黒に汚れるほど忙しく動いて、晩御飯も公民館で大急ぎに食べると、すぐにまた祭りに戻られていました。台風の片付けや被害の対応に追われる中で、祭りの準備や執行をされていました⁽¹⁹⁾」と。この祭りの終了後、島の人から、自宅を会場として祭祀を実施したことで、上野さんもようやく「島の一員になったね」と声をかけられたという。現在、上野さんは、押しも押されぬ竹富島の重要な担い手のひとりとなったのではないだろうか。

万次郎さんの場合

万次郎さんの万次郎という名は、竹富島の人たちからもそう呼ばれているいわゆる通称である。本当の氏名は当然ほかにあるが、本稿では通称で記述を進めていくことにしたい。それは、後に検討することになる万次郎さんの人生の歩みの特質とも関係する理由からである。竹富島社会は、西と東の集落、そして中筋という集落の3つの集落から成っている。そのうち、西集落は、竹富島の観光名所のひとつである「なごみの塔」もある観光の島竹富島の中心集落でもある。万次郎さんは、この西集落の、なごみの塔近くの一画で、縄文屋という工芸品店を営んでいる。竹富島の観光化という点から言えば、先の上野寛さんと同じ役割を果たしていると言えるのではないだろうか。

しかし、万次郎さんの場合は、竹富島社会の中の社会的位置は、上勢頭芳徳さんや上野寛さんとは全く異なっていると言わなければならない。誤解を恐れないで言えば、万次郎さんは、自他ともにそれを認めていると思われるのだが、竹富島社会の一員ではない。著者には、万次郎さんは、意識的に竹富島社会の外部者であろうとしているように見える。同時に、万次郎さんは、一方で、愛情をもって竹富島社会に関わり続けようとしているようでもあるのだ。その不思議な万次郎さんの竹富島社会との関係性は、万次郎さん自身のことばで表現するならば、「越境者の目（視点）」で現在の竹富島社会のあり様を批判的に見ようとしている観察者であると言えるように思われる。

現在の竹富島社会に対する万次郎さんの批判点は、おおよそ次の3点に集約できるように思われる。すなわち、その3点とは、観光化とそれに伴う生活様式の変化による自然環境の、万次郎さんのことばによれば「破壊」、同じく（うつぐみという竹富島の誇る人情を含む）人情と生活文化の「喪失」、そして、観光化に伴って社会的力をもつようになってきた竹富島社会の有力者たちの、これも万次郎さんのことばによれば「横暴」である。このように、万次郎さんは現在の竹富島社会に対する批判的観察者であるのではあるが、同時に本来の竹富島社会の観光のあり方に関するビジョンの持ち主でもある。現在の竹富島の観光化に対する万次郎さんの言う本来の観光化の姿とはどのようなものかについては後に検討することにするが、万次郎さんはその本来の観光化の姿の伝道師たろうとしているように著者には思える。

竹富島社会に対する、より正確に言えば、竹富島社会の現在のような形での観光化に対する批判者である万次郎さんはどのような意味で竹富島社会の一員と言えるのであろうか。竹富島社会に住みながら竹富島社会の批判的な情報を発信している万次郎さんは、ある島の人のことばを借りれば、「きらわれもの」、「危険人物」である。お世辞にも島の人々から受け入れられているとはとても言えないように見える。本稿では、個人と社会の関係性を探求する社会学的視点から、「竹富島社会の一員」であるということを次のように捉えている。まず、何よりも本人の竹富島社会に対するアイデンティティである。第二に、竹富島社会から、それがたとえ潜在的であっても、必要とされ、社会的役割を果たしている、または果たすことが必要とされ、期待されている

ということである。そして、第三に、竹富島社会の何らかの形でのメンバーシップ（竹富島社会の一員としての権利・義務体系への関係性）を有しているということである。第三の点に関しては、万次郎さんの場合は、竹富島公民館の会費を徴収され、祭祀行事への寄付を行い、公民館の総会にも出席しているという。

では万次郎さんの以上のようなある意味で不思議な竹富島社会に対する関わり合い方はどのように形成されてきたのであろうか。その検討は社会学の興味あるテーマであろう。万次郎さんは、1950年、兵庫県但馬地方で生まれている。お父さんは、万次郎さん自身のことばを借りて表現すれば、「なまくら」もので、親子の仲はうまくいってなかったという。それで、万次郎さんは子どものころ、隣のお寺によく通い、そこで育ててもらったというのである。早い時期に親との折り合いが悪く、万次郎さんは家を出て全国の放浪の旅に身を置いてきた。いわゆるヒッピーとして、同じ境遇の仲間たちと全国各地を転々と歩いていたのだという。しかし、この時期に、万次郎さんは39才のとき陶芸の道に入り、有力者からの支援も受けて、東京で何度か展覧を開くまでになっていった。山口昌男氏の「学校の個人的・文化的脱構築—学校なんかもういらぬのか？」にそれらの経緯が詳細に紹介されている。ここでは、その中から次のエピソードだけを引用しておきたいと思う。それは、万次郎さんがまだ生まれ育った近くの地域で陶芸家の道を歩んでいたときのことのようなのである。原文では万次郎さんの本名で記述されているが、ここでは、その表記を「万次郎」と代えて引用しておくことにしたい。

「万次郎さんと兵庫県側の低地の町との関係が微妙であると云ったのは山上の前衛芸術家を鬼畜の如き奴であるとい、町の人自分達の手を負えない息子たちを山上に連れて来て預かってくれと云って（万次郎さんによると2才から90才までの人間を）置いていく。昔の天理教の教会へ不良少年を預けるとくにである。少年達は一日中運動をしたり、スポーツ競技をしたり、万次郎さんの仕事を手伝ったり、本を読んだりして暮らしている。従って万次郎さんの廻りの青少年達には私（山口昌男氏）の本を読んでいる子供たちも多いと云う」⁽²⁰⁾。

以上の引用に記述されている万次郎さんのライフスタイルは、現在の竹富島におけるライフスタイルにそのままつながっていると言える。その放浪時期の比較的拠点的な2つの地域が、ひとつが北海道の礼文島であり、もうひとつが沖縄の八重山地域であったのではないだろうか。万次郎さんは、それら2つの地域では、宿泊施設のヘルパーなどをしながら長期間滞在することを慣習としていた。そして、そのときの経験こそが、万次郎さんに観光への関心を根付かせていくことになったのではないかと推測されるのである。

万次郎さんと観光の出会いで重要なのは、北海道礼文島でのヘルパーの経験ではなかろうか。そして、万次郎さんがヘルパーをしていた民宿は、ある種の旅人たちには伝説の宿と称されている桃岩荘という名のユースホステルの近くであった。そして、万次郎さんが働いていた民宿とその桃岩荘には同じ性格があったという。この桃岩荘では、宿泊者とユースホステルの関係者で行われる夜のミーティングで、船橋俊久氏作詞・作曲の「旅の終り」という歌が40年以上歌われ続

けてきた宿である。その歌の歌詞は次のようなものである。

旅の終り

夢のような旅だった 遠い北の国の 僕は旅の喜びと 旅のつらさを知った
北の国の少女たちと 過ごした夢のせつな 今日君も他の街へ 僕も他の街へ
こんなつらい旅なんか もういやだ 旅を終わろう 汽車に乗ろう（下線部2回繰り返す）

共に山に登ったね 君と手を取りあって 共に海を見ていたね 水は青く澄んで
君の心青く澄んで 僕の心が取り戻す 海の青さ
人と人との出会いなんて いつも別れで終わる
僕は君のくれた夢を 明日も持ち続けよう

この「旅の終り」を夜のミーティングで40年以上歌い続けている桃岩荘ユースホステルは、ある種の旅人たちにとってどのような意味で伝説の宿なのであろうか。この「旅の終り」の歌の由来を朝日新聞記事として紹介した山内浩司氏は、その記事の中で次のように表現していた。「今どき、全室相部屋（男女別室）。消灯・起床時間厳守。トイレはくみ取り。禁酒・禁煙。食事後の食器洗いや布団の上げ下げはセルフサービス。住み込みスタッフ（ヘルパー）と宿泊者（ホステラー）はニックネームで呼び合い、初めて訪れても『お帰りなさい!』と鐘や太鼓を打ち鳴らし熱狂的に迎えられる。1970年代、若者たちの貧乏旅行に支持されていたYHを知る人には懐かしいスタイルが、今なお色濃く残っている」⁽²¹⁾と。この桃岩荘ユースホステルの近くの民宿でヘルパーの体験をしたことで、観光地のホストは観光客（旅人）をどのように迎えなければならないのかについて学び、身に沁みこませてきたのではないだろうか。

万次郎さんの竹富島との出会いは、沖縄が日本本土に復帰した直後の1973年にまで遡る。その年、「ヒッピーとして放浪し、礼文島から流れてきた」のである。はじめて出会った竹富島は万次郎さんをことのほか魅了したようだ。その風景を万次郎さん自身のことばで描き出すならば、まず静寂という音の世界が存在していた。「島で音がするのは機織りの音だけであった」。目に飛び込んできた風景は、「やわらかく、白く、ふかふかとした道路」であり、「サンゴ礁によって築かれた石垣には、ミンサー織りの糸が張ってあった」。思わず裸足で歩きたくなるような風情だったのでなかろうか。竹富島の人たちの人情にも魅せられていた。それは、「おじいとおばあ夫婦が営む民宿」で経験した、三しんとゆんたくによって旅人を迎えるもてなしだった。著者がはじめて調査に入った2007年現在でも、まだそうした民宿があることを万次郎さんが話してくれた。野原荘を例にあげ、「おじい、おばあが太鼓を叩き、息子が三しんを弾いている」、（シーズンには）「もずく採りに連れて行ってくれる」と。

それ以来、万次郎さんは毎年竹富島を訪れることになる。それゆえ、万次郎さんによれば、竹

富島との付き合いは、「35年間になる」とのことであった。そして、来るたびに、小浜荘で宿泊しながら、オーナーのオジイ、オバアとの生活を続けていた。「長いときでは、2ヶ月以上滞在」していたのだった。その間、万次郎さんは、竹富島の人たちとも交流し、現在の竹富島観光のあり方にも関わってきたようである。その一人が現在竹富島観光の象徴的な存在となっている水牛車観光を立ち上げた新田長文さんであったという。ちなみに『竹富町史第二巻竹富島』の中では、竹富島の水牛車観光の始まりについては、次のように記述されている。「水資源の乏しい竹富島では、水牛車はおらず、もっぱら黒牛に曳かせるウシグロー（牛車）で荷物を運搬していたが、昭和40年代に入って竹富島にも水牛が入って来るように」⁽²²⁾ になった。そして、「竹富島に観光客が増え出すと、水牛車は竹富島観光の名物となった。水牛車観光は、1976年（昭和51）に新田長文によって始められた」⁽²³⁾ と。万次郎さんは、竹富島に来るたびに、竹富島の人たちとさまざまな関わりをもってきたと言えるのではなかろうか。

では、万次郎さんが毎年の訪問者としてではなく、竹富島に住みつくようになったのは、いつごろ、どのような契機によるものだったのであろうか。竹富島に住むあるオバアとの出会いがそれ（万次郎さんが竹富島に暮らすようになった契機）である。万次郎さんがそのオバアと出会ったとき、90才であったという。しかも、竹富島で17年間独居老人として暮らしていた。さらに、そのオバアは、「うつと認知症」に取り憑かれていたというのである。オバアと万次郎さんは、いわゆる馬が合い同居するようになった。そして、その同居が、長年「孤独」に過ごしてきたオバアをここのほか元気づけることになったようである。万次郎さんは、白いシーサーや「なごみ地蔵」、そして自筆でペインティングされたTシャツなどを創作し、販売するようになる。そうした中、東京で個展を開くことになった。その個展には、「笑っているオバアの写真もかざってあった」のである。

オバアには5人の子どもたちがおり、竹富島の外に自立して暮らしている。その子どもたちのある者が、たまたま、偶然に、万次郎さんの個展に来て、自分のオバアの写真を見ることになった。彼は、自分のオバアが元気な笑顔姿で写真に写っていることにことのほか喜び、それは万次郎さんと同居したことによるということも知るようになった。この偶然の出会いをきっかけとして万次郎さんは、子どもたちから感謝され、子どもたちから自分たち一族が所有している空き家を万次郎さんに住んでもらいたいとの申し出を受けることになったのである。2006年のことであった。その次の年、著者はフィールド・ワークのため竹富島を訪れた際に万次郎さんに出会うことになったのである。

万次郎さんの日常生活スタイルは独特である。まず、万次郎さんは、自分が住んでいる家の庭と家の前の道路を、毎日何回も掃き清めている。掃き清めた庭は、京都の寺の枯山水の庭のような掃き跡による文様と盛り砂の山が据えられている。それは、まるで「聖地」のような佇まいを見せてくれる。著者には、それが、万次郎さんが竹富島に初めて出会った時の万次郎さんが竹富島に感じた世界を表現しているように思える。日常の食生活もユニークである。その基本を竹

富島で採れる食材においでいる。とくに、海で採れる、例えばもずく、島ダコ、そしてシャコ貝などの海産物を大事にしている。日中晴れた日の引き潮の時間帯には、ほとんど海に出ているといってもよい。しかも、モリ以外は道具は使用しない。万次郎さんがフィールドにしているのは、主に西棧橋付近の海岸沿いの海である。また、上記の海での産物は、万次郎さんにとって竹富島の人たちとの大切なコミュニケーションのツールとなっている。

いまや竹富島の人たち自身、竹富島で採れる海産物などを口にするのがなくなっているが、万次郎さんは、例えば島ダコが採れたときなど、それを島の人たちにおすそ分けをすることで、親しい人間関係を紡いでいるのである。さらに、万次郎さんには、竹富島との関係で、もうひとつの生活信条がある。それは、竹富島で稼いだお金は、なるべく竹富島の中で使ってしまうというものである。それは、いわゆる竹富島で稼いだ利益の島内での共有化の信条と行動なのではないだろうか。さらに言えば、ここまで検討してきた万次郎さんの日常生活の生活スタイルこそ、万次郎さんがはじめて竹富島と出会ったときの、竹富島の人たちの生活スタイルだったのではないだろうか。今となっては、とくにそうした生活スタイルは、竹富島では廃れてしまったものなのではあるが。

また、万次郎さんによれば、彼が海にもぐっているのは、単に食材の採取のためだけでなく、「観光化」によって汚されている海の清掃を行うためでもあるという。竹富島の海は年々汚されており、投げ捨てられたカンやビンが散在するようになっているのである。万次郎さんはそうしたカンやビンを清掃し続けている。

そうした万次郎さんの竹富島社会における存在意義はなんだろうか。著者には、それは、歯に衣着せぬ万次郎さんの竹富島社会に対する、誰はばかすることのない批判のように思われる。著者は、万次郎さんのそれらの批判が適切なものであるかどうかの判断はしないことにしようと思う。しかし、それらの批判的諸言動が、現在の竹富島社会における万次郎さんの存在意義に大きな重みを与えていることは間違いないのではないだろうか。万次郎さんの竹富島社会に対する批判的言動は多岐に渡るが、ここでは、観光化に関わる以下の2点について紹介しておこう。その第1は、観光化にともなうモータリゼーションの展開に対してのものである。すでに言及したことではあるが、竹富島観光は、主として石垣島の旅行代理店がバックツアーなどで送り込んでくる大量の観光客を2～3時間で竹富島内の観光地を案内するというマス・ツーリズムである。そのためには大量の観光客をのせて竹富島中を走り回る自動車は竹富島観光にはなくてはならないものとなっている。著者が本研究のために竹富島を訪れるようになって何回目かの現地調査日であった2010年2月現在では、300人余の人口の竹富島に、自動者数が200台の大台を超えていた。マイクバスも50台以上となっており、またレンタサイクル用の自転車も、1200台以上となっていた。

万次郎さんに言わせれば、「観光をやっている人は、狂気。集落内も車でとばし、とくに高齢者の人たちが被害を受けている。道路が乾燥しているときなど、砂埃で窓を開けていられない。暑い日でも窓を閉め、家の中でじっとしている高齢者の人たちも多いのだ。竹富島では、人では

なく車の方がいばっている」。また、「車が集落内も含めて走り回るため、道路が固められ、かつての白く、柔らかく、ふかふかしており、思わず裸足で歩きたくなる道は、いまや跡形もなくなってしまった。残っていれば、竹富島の貴重な観光資源となったはず」のものなのであったというのである。

万次郎さんの島の有力者の人たちに対する批判も厳しいものがある。竹富島は集落と自然環境の景観を守り、維持してきたことで有名な地域社会である。その精神的象徴が、全国的にも著名な、「竹富島憲章」であることは言うまでもない。また、竹富島の集落景観は、1987年に、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。それゆえ、その島の景観を守るために、数々の厳しい規制が存在している。公民館役員の大事な仕事のひとつは、そうした決まりを島民に守らせることであり、事実竹富島では、日常生活の事柄にまで踏み込んで、役員による検査が定期的に行われてきた歴史を有している。しかし、万次郎さんによれば、有力者の人たちはこれらの諸規則を少しも守らないというのである。「目立つ看板、アルコールの自動販売機、竹富島の街並みに合わない住居（コンクリートブロックの家）」などがそれだ。また、「不法駐車、飲酒運転」もし放題で、「竹富島は治外法権の島」となっているというのである。万次郎さんによれば、「権力者はどこまでも悪いことをしても許されるのが竹富島」なのだ。

普通、ここまで見てきたような批判を公言してはばからない行動をとり続けていたら、島中の総スカンをくらいとても住んでいられないような状況となるのではないだろうか。だとするならば、万次郎さんが竹富島に住み続けていられるのはなぜなのであろうか。万次郎さん個人の性格の問題に還元しないで、むしろ竹富島社会の社会的性格からその理由を説明しようとする、それはどのように説明することができるものなのだろうか。万次郎さんの竹富島社会に対する批判的言動は、少なくない竹富島の人たちの声なき声を代弁しているところがあるのではないかというのが、著者の仮説である。

残念なことではあるが、竹富島社会には、現在観光開発をめぐる鋭い対立状態が存在している。竹富島には、島内に二つの大きな観光業のグループが存在しているが、それら二つのグループ間には、竹富島観光の主導権をめぐる争いがあるように著者には見える。著者が竹富島にフィールド・ワークのために訪れるようになった2007年以降、その対立は顕わになっていったように思える。その象徴的な出来事は、「リゾート開発」と「水牛車ステーションの移転」をめぐる対立であった。前者をめぐるのは、裁判にまで発展したし、後者をめぐるのは、竹富島で初のデモ行進が行われたり、水牛車ステーションの撤去を求める立て看板が乱立したりする状況を生み出したりもしていた。人口300人余の小さな島社会においては、しかも竹富島社会の生活を支えている主産業である観光事業をめぐるものであればなおさら、そうした争い事に否応なく巻き込まれざるをえないのではないだろうか。言いたいことがあっても、自分の胸の内に閉じこめざるをえないということは大いに推測されよう。

万次郎さんは、それらの争い事や対立には中立的存在である。しかも、すでに指摘してきたよ

うに、「越境者の視点」で、誰憚ることなく思ったことを口にしてきた。その視点は、かつての竹富島の素朴で、美しく、ホスピタリティの豊かな観光を取り戻そうということにある。島内には、そうした万次郎さんの言動と立場に、決して全面的にというのではないだろうが、共感と無言の支持を示す人たちもいるのではないだろうか。事実、万次郎さんには、さまざまな島の人から相談事や情報が寄せられるのだという。竹富島社会がかつての「うつぐみ」の精神を取り戻し、竹富島観光のよりよい発展のために島中の人たちが協働するようになっていくためには、もしかしたら万次郎さんのような人を竹富島社会は必要としているのではないだろうか。

2014年3月、恒例のこととして、著者が竹富島を訪れたさい、「水牛車ステーション」の撤去を求める看板が乱立していることに驚かされた。対立が、そうとう激化してしまっていると感じざるをえなかった。同時に、そうした対立を、もしかしたら克服し、島の人たちみんなで協働し、新たな観光の形をつくりだす方向に動くのではないかという明るい兆しが生まれていることも知った。それは、対立するグループを超越して集った次の竹富島社会を担うことになるであろう若者たちの行動であった。それらの若者たちは、「明日の竹富島を考える若者の会」を立ち上げ、まず観光の島竹富島の「看板乱立」問題を取り上げ、島民すべてにたいするアンケート調査と、その調査にもとづく問題提起を行っていた。なぜ、若者たちは「明日の竹富島を考える若者の会」を立ち上げ、アンケート調査を行わなければならないと考えたのだろうか。アンケート調査結果を島民の人たちに報告する文章の中で、その理由を次のように記していた。少々長くなるが、重要な文章なので要約することなく引用しておきたいと思う。

「私たちは、島内で意見の衝突が起こる度に、島民同士の議論の進め方に強い疑問を持って来ました。自分と意見が対立する者を“一方的に”打ち負かすべく、集団で相手に意見を言わせない雰囲気を作り、自分達だけ大声で同じ主張を繰り返す。果ては、倫理に反したこと、違法なことまで、いとわず行う。まるで、そうしたことをなりふり構わず行えることが、熱意の証であり、その熱意の量で議論の勝敗が決まると考えているかのような無節操な振る舞いでした。率直な感想として、残念ながら、現在の竹富島は、島内の様々な問題を『議論する下地すらない未熟な島』だと私たちは考えています。

今回の意見看板乱立は、今までの悪しき議論のあり方の最たるものだと言えるのではないのでしょうか。そういった意味で、この問題は、島が抱える最も重大かつ構造的な問題を象徴するものだと考えました」⁽²⁴⁾（下線による強調は原文による。）。

以上の「アンケート結果」の文章にある竹富島社会に対する「明日の竹富島を考える若者の会」に集う若者たちの認識には、万次郎さんの竹富島社会に対する批判とも通底する視点が存在しているのではないだろうか。それは、観光開発をめぐる対立の激化に竹富島社会と竹富島観光の未来に危機感をいだいた若者たちが、万次郎さんの「越境者の視点」を取得し、未来の竹富島社会形成に向けて自分たちの考えを公にし始めるようになったことを示しているのではないだろうか。実際には、「越境者」ではない若者がそうした行動にでるには相当の勇気と覚悟があった

のではないかとと思われるのである。それが、新たな「うつぐみ」の形を創造するような社会づくりに繋がっていくことを心から願いたい。

暫定的な結語

ここまで、上勢頭芳徳さん、上野寛さん、そして万次郎さんという3人の方々の竹富島社会への移住の物語を検討してきた。それらの移住物語が、個人と社会の関係を探究する社会学において「はじめに」および「第一章」において述べたことに加えさらにどのようにテーマ化されるかについて考察することで、本稿の暫定的なまとめとしておきたいと思う。結論を言えば、本稿で検討してきた竹富島における移住物語研究は、マイノリティーや移民研究のテーマとも共通するテーマが孕まれているのではないかとということである。マイノリティーや移民研究の一つの重要な研究テーマは、同化と排除をめぐる葛藤であろう。すなわち、移民やマイノリティーであるがゆえの葛藤とは、移民先の主流文化やマジョリティー文化への同化を要請されつつ異文化を身にまとっていることやマイノリティーであるがゆえに排除されるというところから生じるであろう。確かに、本稿で検討してきた3人の方々の移住物語にもそうした側面が内在していた。しかし、竹富島の3人の方々の移住物語には、そうした「同化」と「排除」をめぐる葛藤だけでなく、それを超えたテーマが存在していたように思われる。

そのテーマをキーワードで表現するならば、「継承」と「新創造」というものとなろう。竹富島は、地域社会の活性化論や再生論から言えば、観光化によって成功を手にしてきた地域社会であると言えよう。それでもなお、竹富島で生まれ育った人たちだけでは、竹富島の伝統的な祭礼・生活文化の継承・存続や観光化への対応などは極めて難しかった事業であったろうことは、本稿での検討からも容易に想像しうることはなかろうか。人材の供給と観光化や新たな社会形成における新基軸の打ち出しにおいては、とくに移住者の方々の力は大きいものがあつたのではなかろうか。繰り返しになるが、その移住者の役割を表現するキーワードこそ、「継承」と「新創造」なのである。そして、「継承」と「新創造」にこそ、移住者の方々の竹富島社会の一員になった意味が存在しているのではないだろうか。

註

- (1) 『星砂の島 (第10号)』, 前掲書, 16頁。
- (2) 2007年1月1日付八重山毎日新聞記事。
- (3) 2003年1月1日付八重山毎日新聞記事。
- (4) タキドゥン26会 (竹富小68期生・竹富中生18期) 『竹富島に生まれ来て——21世紀へのメッセージ——』 2003年12月を参照。
- (5) 1997年9月26日付八重山毎日新聞記事。
- (6) 同上。
- (7) 上勢頭芳徳さんに関する記述は、主として、2007年に著者が行ったインタビュー調査の記録に基づいている。

また、後の上野寛さんと万次郎さんに関する記述も同調査の記録に基づいている。

- (8) 森田真也「観光と『伝統文化』の意識化——沖縄県竹富島の事例から——」（日本民俗学会『日本民俗学』第二〇九号，1997年所収），44～45頁。
- (9) 東京ソルボンヌ塾『竹富島に何が可能か』東京ソルボンヌ塾，1996年，125頁。
- (10) 同上，22～23頁。
- (11) 同上，123～124頁。
- (12) 三浦クリエティブ『うるま Uruma No.109』沖縄教販，2007年4月，26頁。
- (13) 呉錫畢「ピノキオ観光と地域発展の可能性——竹富島からみる沖縄観光の現状分析——」（沖縄国際大学南島文化研究所『八重山の地域性』南島文化研究所叢書Ⅰ，東洋企画，2006年所収），260頁。
- (14) この点について，八重山毎日新聞に「やいま千思万想」を連載している「大阪コレgium・ムジクム」主宰している指揮者の当間修一氏は，4月17日の「やいま千思万想」の中で次のように言及していた。「島の財産は、『自然』と『人』だと再三書いてきました。そこに人が自然と共に創る『創造品（モノ）』も入れておきましょう。「人は異文化を求めて旅をします。アイデンティティーとさらなる新天地を求めて。八重山は未来を開くクリエイターの新天地となってほしい」と。
- (15) 竹富町史編集委員会『竹富町史第二巻竹富島』南山舎，2011年，490頁。
- (16) 同上，489頁。
- (17) 新川明『新南島風土記』岩波現代文庫，2005年，16頁。
- (18) 2012年5月16日付八重山毎日新聞記事。
- (19) 2013年8月号『やいま』，57頁。
- (20) 山口昌男「学校の個人的・文化的脱構築—学校なんかもういらぬのか？」（東京芸術センター『Diatext. ダイアテキスト02』星雲社，2000年所収），31～32頁。
- (21) 山内浩司「時を超え響く歌声の軌跡」（2012年11月3日付朝日新聞）。
- (22) 竹富町史編集委員会，前掲書，447～448頁。
- (23) 同上，448頁。
- (24) 「明日の竹富島を考える若者の会」による「意見看板の設置に関するアンケート」の結果報告の文章。

〔付記〕

この論文の作成には竹富島の多くの方々の協力があった。毎年毎年竹富島を訪れてはインタビューをお願いに伺っても忙しい貴重な時間を割いてインタビューに応じて下さった方々にお礼を申し上げたいと思う。とくに，この論文で取り上げた上勢頭芳徳さん，上野寛さん，そして万次郎さんにはお礼のことばもないくらいお世話になった。しかも，拙稿の草稿を読んでいただき，著者の聞き違いや間違った理解，そして島民の方々に迷惑となる表現のチェックをしていただいた。さらに，実名で論文を公表することをお認めいただいた。重ねてお礼の気持ちを記して表しておきたいと思う次第である。

The Development of Tourism and the Stories of Newcomers in Taketomi Island(2)

—Examining the Newcomers' Contributions to the Development of Tourism in Taketomi Island—

UCHIDA Tsukasa

Abstract

A lot of social problems have arisen from unequal and unbalanced regional development under the globalization of modern capitalism. The problem that a lot of communities and local societies have been declining and facing the crisis of disappearing by depopulation is one of those problems. One of important tasks of sociological area studies is to make fundamental policies for settling the problem.

I have researched such kinds of communities and local societies specially in Hokkaido, Tohoku and Okinawa areas for many years. I have also found that a lot of newcomers from big cities had lived in such communities and local societies and that they had played a large number of important roles to develop and strengthen their communities and local societies against the declining and disorganizing tendencies of their communities and local societies. Why have they moved into such declining and disorganizing communities and local societies from big cities? Why have they been able to contribute to the developing and strengthening works? What kinds of social interactions have been there between the newcomers and old residents in the works? I intend to answer such questions in a series of articles. In this article I intend mainly to examine the stories of 3 newcomers in Taketomi Island.

Keywords: newcomers, encounter, community and social identity

(うちだ つかさ 本学人文学部教授 生活構造論)